

## 何ができるか

2021.4.6

1年以上の長きにわたり、コロナ禍と呼ばれる状況が続いている。この間、ずっと違和感を覚えていることがある。それは、テレビなどの報道を見ていると、国民の皆さんの基本スタンスが、国に、政府に何かをしてほしいというものになってはいないかという点である。

確かに、休業要請や時短要請への補償金の支給などはわかる。だが、基本的に何かをしてくれると期待しているように感じてしまうのは、どうなのであろうか。果たして、今は、そのようなときなのだろうか。

第35代アメリカ大統領のジョン・F・ケネディという人がいる。日本人では、米沢藩の上杉鷹山をいたく尊敬していた方である。そのケネディが「皆さん、国家が自分に何をしてくれるのかではなく、自分が国家のために何ができるかを考えましょう」という有名な言葉を残している。

今は、国民の一人一人が日本という国のために、何ができるかを考えるときではないのか。オーバーに言えば国家存亡の危機である。だからと言って、特別なことをしようと言っているわけではない。当たり前の感染防止対策とちょっとした我慢を続けるということである。そして、医療従事者などへの感謝の気持ちを大切にすることである。

このような状況だからこそ若い人たちには、ぜひ高い志を持って生きてほしいと思う。10年前の東日本大震災を契機に、志を持って努力を重ねている若者がたくさんいる。人のために役に立ちたい、社会に貢献をしたいという強い思いである。今回のコロナ禍でも、きっと多くの若者が何かを考えたとはいえずである。その思いが志となって、その人の人生を紡ぎ出していくことだろう。

2年ぶりとなった春の選抜高校野球大会の開会式では、仙台育英高校の島貫丞主将が、人の胸を打つ堂々とした選手宣誓を行った。島貫選手は、福島市出身である。震災から10年の節目に、東北代表の仙台育英高校が、それも福島市出身の選手が晴れの甲子園の舞台上で選手宣誓をするのも何かの縁であろう。

「宣誓。きょうここに、高校球児の憧れの舞台である甲子園が戻ってきました。この1年、日本や世界中に多くの困難があり、それぞれが大切な多くのものを失いました。答えのない悲しみを受け入れることは苦しくてつらいことでした。しかし、同時に多くのことを学びました。当たり前だと思ふ日常は誰かの努力や協力で成り立っているということです。(中略)そしてこの3月で東日本大震災から10年となりました。日本、世界中に多くの協力や支援をいただき、仲間を支えられながら困難を乗り越え、10年前、あの日見た光景から想像できないほどの希望の未来に復興が進んでいます。これからの10年、私たちが新しい日本の力になれるように歩み続けます。(後略)」

これからは、「何をしてもらえるか」ではなく、「何ができるか」と少しでも一人一人が考えられれば、結局は、このコロナ禍も収束に向かう時期が早くなるのではなかろうか。人のために何ができるか、社会のために何ができるか、自分には何ができるかと考えることは、今もこれからも重要なことである。